

益城町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会

日時：2019年10月11日（金） 10：00～12：00

場所：役場仮設庁舎 2階応接室

出席者：鈴木委員、犬飼委員、宮田委員、竹原委員、上野委員、三輪委員、倉田委員、永石委員、岩下委員、澤田委員、小葉委員、清水由衣子委員、清水晃委員、橋場委員、堀川委員、木村委員、福永委員、光永氏（淵上委員代理）

内容：

1. 開会

2. 町長挨拶

- 西村町長
 - 本町では現在、昨年度策定した第6次益城町総合計画に基づき、取組を進めているところ。
 - 被災者の住まい再建を第一に住環境の整備を進めており、特に災害公営住宅については全671戸が令和2年3月までに完成する予定。今後は、自治会等のコミュニティづくりを進めていく。
 - 新旧のコミュニティに対して、福祉・医療・介護・健康づくりなどを一つの塊として、さらに地元の方々やNPO、大学等とも協力しつつ重層的な見守り体制の構築を考えている。
 - 熊本高森線の4車線化や、木山の区画整理事業に関しても、多くの住民の方にご協力を頂きながら進めているところ。
 - ハード事業だけではなく、それらを活かして震災前以上の町の賑わいづくりにも着手している。
 - 今回議論いただく総合戦略は、昨年度に震災後の現状に合わせて一度見直してはいるが、益城町が町内外から見て魅力的なまちになるためには、世の中の変化に先んじて対応し、それをまちづくりに生かしていくことが必要。
 - 各界の第一線で活躍されている委員の皆さまには、選ばれるまちになるための戦略について、活発なご議論を頂きたい。

3. 要綱等の説明

- 事務局より資料P.2～5に基づき説明。

4. 委嘱状交付

- 西村町長より委員を代表して清水由衣子委員に委嘱状を交付。

5. 委員等自己紹介

- 各委員自己紹介。

6. 会長の選出、副会長の指名

- 会長は鈴木委員、副会長は稲田委員に決定。
- 鈴木会長あいさつ
 - 「まち・ひと・しごと創生総合戦略」は、元々、地方創生という言葉が注目された。いくつかの自治体がなくなっていくという増田レポートがあり、そこから地方創生の取組が始まったというところ。
 - 国、県、基礎自治体が地方創生に向けて、人口ビジョンに基づいた創生総合戦略を策定した。益城町でも作成して取り組もうとした矢先に地震が起きた。地震によって、当時考えていた総合戦略の前提が崩れてしまった。
 - 現在、3年半が経っているが、仮設住宅でお住まいの方の再建を考えていなければならない、そしてそれを創造的復興につなげなければならないというところ。
 - 非常時向けの対策を常時＝日常の生活に定着させるようなまちづくりをしていく、というのが益城町に求められていることと思う。
 - 先日あった安倍首相の所信表明の柱は1億総活躍社会、外交安全保障、地方創生、の3つ。地方創生の項には、日本経済全体のことが書いてあるが、地方創生という看板で日本全体の発展につながるということを表しているという内容だった。重要な課題としてあり続けていると認識した。この審議会で回数を重ねることは難しいと思うが、それぞれの委員の分野から忌憚らない意見を出していただき、良いものを作っていければと思う。

7. 諮問

- 西村町長より審議会会長へ諮問。

8. 報告

- 事務局より資料に基づき説明。

9. 委員討議（◆：会長 ○：委員 △：事務局）

- ◆ 総合戦略がこの審議会の守備範囲だが、意見を自由に出していただければ幸い。
- PDCA サイクルの中で Do が大事。Do のところをどうするか、役場でできるかというところ。ヒト・モノは一番大事なところ。やり方として審議会はこれでいいのか、Do のところが大事だと思っている。
- △ 総合戦略については、KPI を設定している。その目標に対して現状が達成できているかどうかの検証を行っていくことになっている。現在、第1期の検証を実施中。その結果を第2回審議会で報告させていただきたいと考えている。検証結果を踏まえ、委員の皆さんからのご意見をいただければ、と考えている。また、こういう事業をした方がいいのではないかと具体的な意見をいただきながら策定をしていきたいと思っている。
- ◆ 資料1のP10に、今回のプロセスの中で、個人や団体の意見を吸い上げていくということになっている。これはその先のDOのところまで見据えてということかと思う。

- 総合戦略という議論については、たたき台がないと議論できないと思う。これまでもそういう形でされてきたと思うので、その要領で進めていただければ幸いと思う。
- 仕事柄、いろんな市町村に行かせていただいている。市町村それぞれの特徴を見つけて紹介をしている。益城町では関係人口の増加ということでフットパスコース設定の取組をされているとのこと。芦北町でもフットパスをされているが、海や山の美しい景観があり、ストーリーを作りやすい。PR も非常に上手。産山村には「産山村の取扱説明書」という村の特徴を生かしたパンフレットが作成されている。それぞれの特徴が生かされている。益城町には物語を伝えるというのが難しい。人を呼び込むにはストーリーを作って PR していくということも大切だと思う。
 - ◆ 町としての売りとか PR とか、そういうことが噛んでこないとうまく広がってこないということだと思う。
- 現時点の総合戦略の中で「地震からの復興」ということで、町に仕事があるということが大事にされていて、新規就農者や創業件数が KPI（重要業績評価指標）になっている。しかし新たな視点というところでは、事業承継という視点が必要になってくるのではないか、と思っている。特に今回の地震で商工関係ではグループ補助金や農業補助金で関連施設は新しくなったところもある。こういう事業資産を長く使っていく、という視点が必要なのではないか、と思っている。他の地域とは違う視点、ということであれば、そういうところに視点を置いてもいいのではないか、とも思う。
 - ◆ 企業誘致も大事だが、今ある仕事を減らさないという観点も重要と思う。また、震災をプラスに生かしていくという点でいえば、事業資産が新しくなった、というのは他地域にはない話。そこをどうやって特色として位置付けて長期にわたって活用していくか、というのが大事になると思う。
- 私が一番興味あるのは町のにぎわい、活気というところ。町を歩いていただきたいということであれば、県道熊本高森線はまだ歩ける状況ではないが、将来的には中心市街地をフットパスで歩けると良いと思っている。前提を合わせる意味でも、町の活気、にぎわいというのは何か、というところを話ができればと思う。修学旅行生を沢山呼び込んだ、ということで関西から呼び込んでもその人たちは一回きり。まちの賑わいとは、自分は「光」と思っている。熊本市内の光電車は街のにぎわいづくりに一役買っている。「震災後はパチンコ屋さんが光をずっと灯していて心が落ち着いた」という話も聞いた。私どもとしては、イルミネーションをやりたいと思っている。それができて他の方々が真似をしていただければ、にぎやかな街の形づくりになるのではないか、と思っている。活気とは何か、にぎわいとは何か、のところを町民の皆さんにも理解してもらいながら作りこめればと思っている。
 - ◆ 昨年、専門家の方の講演を聞かせていただいたときに、「まちの色は大事」という話を聞いた。町全体の建物などが、町と調和する色合いになるだけでも、町のカラーになるという話をされていた。また、企業の誘致だけではなく現在ある仕事をどう承継していくか、というのは確かに非常に大事だと思う。
- 若い世代が移住してくる、そして子供が学校に通って、学校で楽しく過ごす、というのが我々として一所懸命やっていること。どうやったら若い世代が益城町に移り住んできてくれるかということが重要と思う。飯野小学校に私の子供が通っているが、長男が飯野小学校に入学したとき（約 6 年前）は 100 名を切っていたが、今は 164 名となっている。飯野地区に住居等が整備されたというのが一番の原因だが、子供の声が聞こえると町に活気ができてくる。若い世代をどういう風にして移住しても

らえるか、将来を形作るうえで重要だと思う。地域愛を育むという言葉もあるが、自分が益城町に住んでいて、益城町の良さというのは町を出てからわかること。町の歴史とか文化を教えていくというのはすごく大事なことと思う。たとえば、飯田山の名前にまつわる昔話は意外と知られていない。まんが日本昔話にも出てきて、「こんな話が自分のところにもあるんだ」とすごく印象に残っている。また、四賢婦人記念館に行ってみたら、「こんなすごい人たちが歴史に埋もれているんだ」という想いを持った。こういったことを学んでいくと、地域に対する誇りが芽生えてくると思う。そうすると地域をもっと良くしていきたいという意欲につながっていくと思う。5年という期間でそこまでできるか、というのはあるが、そういう若い世代に将来を担ってもらえるような取組を積極的にしていただきたいと思っている。

◆ 小学校の児童数が倍になった最大の要因はどこにあるか。

○ 新興住宅街があったので急激に増えたというはある。地元で育てて自分の子供を同じ小学校に入れる、という人と、外から来るという人の2種類がある。しかし、学校の良さは通っているとわかってくる。PTA活動においても、最初は離れている人も、段々と積極的になってくるということがある。

◆ 定住している人の生活をどう魅力的にしていけるか、というのは関係人口・交流人口の増加に関して土台になる部分だと思う。

- 若い人たちに沢山来てもらうためには、その受け皿となるように、保育所や一時託児等が大事だと思う。定住促進事業もあって少しずつ増えてきているが、農業の町なので食べ物がおいしいとか水がおいしいとか、子育てをする人にとっては環境が良いと思う。ベッドタウンとしての魅力を発信するというのも大事。大きな観光というのはない。市内に近いし、空港や高速道路のICもあり、交通アクセスも良い。土地が市内に比べて安いから、という声も聞く。そういうところを強調できれば、と思う。
- 飯田山の話は小学校低学年の授業で取り上げている。地域の先人を知るとということで、益城中央小学校では志賀鉄太郎さんの授業を入れていて、四賢婦人の授業もこれから入れていきたいと思う。木山城址や広安校区の大規模な遺跡を踏まえた授業を取り入れて、素晴らしいふるさとということを子供たちに教えていきたいと思う。

あとはコミュニティスクール。地域とPTAとで学校が地域にどんどん開かれて行って、学校の中でいろんな行事が行われるように、ということも考えていきたいと思う。

◆ コミュニティスクールを活発化していくための課題はあるか。

○ すべての学校でコミュニティスクールを立ち上げたが予算がないと動けない部分もある。そこに自由なお金があると良いと思っている。また、人も大事。良い教育や良い保育が行われるところでは、それを求めて人が集まってくる。

- 私には3人の子供がいて、福岡市の早良区の方の小学校に行っている。曲淵小学校は地元の子供がいなくて校区外から子供が来られるような制度があった。子どもと地域住民の合同で運動会があったりして盛り上がっていた。そこで育った子供がいつか帰ってきて、自分の子供に教育を受けさせたいという考えもあると思う。山の中で魅力ある小学校に遠くから通ってくるという状況だった。子供がいなくなると寂しくなるので、長い目で見て、ベッドタウン化する+魅力あるものを、というのが大事と思う。

また、震災を受けて体験学習というような話があるが、益城町には空港という財産がある。さらに民営化ということもある。民間としては稼がなければならないはず。益城町の震災の話と、空港という面白い施設と益城町、また崇城大学の授業等ともあわせて、空港を一つの観光誘致のインフラとしてもプログラムとして面白いと思う。

- 娘が二人いて幼稚園と小学校に通っている。最初は熊本市にいて、転勤で益城町に引っ越して、家を建てる時に熊本市か益城町かで、実家に近い益城町を選択した。住む場所を選択するのは、結婚するとき、子供が一年生になるとき、退職のとき、というタイミングだと思う。幼稚園のお友達の家の近くに家を建てるということもあるのでそれはすごく大事。幼稚園のアピールポイントを明確に。勉強させたい親もいればスポーツさせたい親もいる、遊ばせたい親もいる。そういうアピールポイントをしっかり出すことができれば、そこから定住につながっていくと思う。益城幼稚園も第二幼稚園も、無償化に伴って保育園にばかり行って定員割れしている。幼稚園の良さを知らない人が多いので、幼稚園の特色を発信できると良いと思う。遠くからでも来たいと思ってもらうと良いと思う。
 - 特色を作り出していくというのは良いと思う。
 - 益城幼稚園はすごく遊ばせてくれる。親がさせないようなことでもどンドンさせてくれる。でもそういう良いところが発信されていない。
 - 自分のところもそういう幼稚園をわざわざ探して、わざわざそういうところに行っていた。
 - 益城に住むことを選択したのは、医療費が安いこともポイント。また、土地が安いということもポイントだった。
- タイトルにもあるが「ひと・しごと」に尽きると思う。スピードが大事。民間にならって、良いことはどンドンやっていくと良い。益城町に魅力ある企業誘致、魅力あるショッピングを作っていかなないと人口減る一方だと思う。益城町に医療センターを持ってこないといけないと思っている。大型ショッピングセンターは無理。益城町は何をもって人を呼ぶ、企業を呼ぶのかということを考えるべきだと思う。スピードが大事だと思う。土地区画整理で時間をとられている。大津町は本田技研で人がたくさん来ている。何を最優先でやるべきかと考えて、人を増やすために企業を呼び、従業員が増える、というのが大事と思う。データをもとに今ある人口の年齢別・業種別を詰めていくといろいろ見えると思う。
 - ◆ まち・ひと・しごととは連関していると思う。熊本市は「しごと・まち・ひと」としていたと思う。人口のことを考えても、3方面から切り込んで、うまくリンクして効果が出ると思う。
- 企業誘致と地場企業の支援をやっている。町だけでなく県も誘致をやっていかなければならないが進んでいないということもある。空港が2023年に生まれ変わる。交流広場という場所もある。フットパスといえば海とか川となるが、元気な人であれば四賢婦人から空港まで歩いてもらい、その途中でJA等の協力で物産館を置いてもらって、帰りは自動運転バスで帰る、というのは良いと思う。空港まで歩いていくという発想はあまりない。コンセッション事業者とどういう空港にしていけば良いかということも議論していく。

また、仮設団地近くの12haの土地に何か誘致できないか、ということを考えている。近年、SDG's（持続可能な開発目標）というキーワードがあるが、空港周辺に植物由来のプラスチック代替素材を扱う企業や、スポーツ医学・スポーツ医療といった視点から医療系の企業を誘致できればいいと

思っている。

空港が今までとは違う方向に生まれ変わるので、それを活用して活性化していくと良いと思う。

- 空港近くのゴルフ場用地まで含めて企業誘致をできるような拠点として考えてほしいと思う。空港から津森の方は人口が少ない。県でも是非考えていただきたいと思う。
- ◆ 空港は大事。大学生に聞くと、空港に行ったことはあるが、「空港が益城町である」という認識がない。益城町には空港があるんだ、ということをしかりと伝えるべき。益城町とリンクさせていただくというのが大事だと思う。
- この委員会の前に、町の民生委員の高齢者部会で認知症と災害からの復興についてお話ししてきた。医療については、熊本地震からの再生ということが一つあるのと、大きなうねりの中で医療をどう考えるかというのがある。益城町の立地という中で多面的に考える必要があると思う。まちづくり・人づくりという観点からいうと、医療というのは患者と医師という関係だけではなく、関係する業種が非常に多い。そういう意味では空港と似ている。一時期、いろんなところに空港ができたが、空港ができる・運営するというので、財が集中することになるので非常に地域にとって有効。
また、益城町には高校がなくて出て行ってそのまま出て行ってしまうということになっている。いっそのこと、医療や看護の専門学校を作って、教育と仕事と生活が同時にできるようなものが良いのではないかと、思っていた。また、災害からの再生ということと言うと、医師会のムードが沈滞している。私が知っている先生も撤退されたりしている。医者がそこで医療を続けるというのは使命感というのがあって成り立つところがある。益城町に医療の火を消してはいけないという動機付けと、この先の見通しというのがないと、皆さん 60~70 代になってきていて医療従事者も高齢化しているので、若い開業医や医者を誘致しなければならない。益城町の中に医療センター的なものを作るというのも大事。だが、医療というのはかかりつけ医というのがあって、そこから重症になると地域の基幹病院、もっと重症になると都心部の救急病院という階層がある。益城町の病院というのは家族の相談にもなるような病院。それが風前の灯になってしまっている。クリニックセンターのような考え方はあると思う。そこに付属して、医療職、看護職を育成するという場があって、10年20年という計画で人を循環させていくような仕組みというのは大事と思う。
- ◆ 益城町の医療関係者の中でそういう話ができるか。
- 開業病院は一匹狼の人が多い。みんなを集めて何かをやろうというのはまとまりにくいところではある。でも、こういう時なので地域の医療を守るためにやらねばいけない。益城町内では廃業、あるいは廃業を検討している人もいるようだ。「例えばこういう構想があるが乗るか？」というような話は同じ立場の人間からは言いにくい、こういう場で言ってもらえると乗ってこられる先生もいらっしゃるのではないかと、思っている。
- 交通事業者は移動を支える。まちづくりにもグループとして携わっている。9/14に桜町熊本を開業した際、公共交通が無料になったが、10万人予想のところ、25万人の方が来られたとのこと。その時、交通費を意識しないとこういう移動が発生するんだ、と思った。その都度支払うともったいない、という感覚なのか、と思った。今はやりのサブスクリプション（定額制のサービス）もあるが、運賃を意識させない施策というのは有効だと改めて思った。

公共交通に人が乗るようになると、交通だけのにぎわいではなく、他の部分にも効果が落ちると思う。9/14 の公共交通無料の際には、天草の商店街で来客が 1.4 倍になったとか、山鹿市の温泉に通常の 3 倍の人が来た、といった効果も創出された。移動についてもコスト負担を見直すいい機会と思った。とはいえ、なかなか若い人と公共交通機関との親和性はない。非常階段のようなもの。安心感を提供しているという側面もある。

一方で、バス事業者の担い手も高齢化や人不足もあり路線維持が難しい状況。一昔前は利益がないから路線撤退していたが、今は乗務員の数が足りないで走れなくなっている。この状況を改善するためには、バスで見なくてもいいところもあるのではないかと、乗り合いタクシーや将来的には自動運転に切り替えていただいて、バスと他のモードの組み合わせになるべきと思う。また、高速バスを運行していて、インバウンドの入り込みを考えると、益城インター付近に拠点を設けるべきかと思う。福岡方面へ行くにあたって、東地区の方は JR を使わず、高速バスの利用が多い。そこで福岡方面との交流を生み出すというのも検討していきたいと思っている。

◆ 公共交通に関しては、全体の波及効果を考えると黒字だった、ということにもなるのかもしれない。

- 地方創生はそもそもなんで始まったのか、ということ。増田レポートが出て、消滅可能性都市が名指しされた。なぜ消滅するのかというと、増田レポートでは女性の数が減るから消滅可能性になるとしている。女性はなぜ減るかということ、女性の働き場所がないから。もっと巨大な雇用がある東京圏に吸収されてしまう。そして東京圏は出生率が日本で一番低いので、そこに若い女性が集められて、そこで子供が生まれないので、急速に人口がしぼんでいく。女性がポイントである。みんなあまり意識していない。総合戦略を考えると、女性や子育ての支援を考えてもらいたい。次世代をどうしていくかというのがとても重要。女性の雇用をしっかりと考えていく必要がある。熊本の場合は復興需要で雇用は堅調だが、復興需要はどちらかというと男性需要で心配だ。2015 年国勢調査から 4 年経過したが、熊本県の人口は 38,000 人減っているが、男性が 15,000 人、女性が 23,000 人減っている。女性がたくさん流出しているということ。益城町もそうだし、熊本県全体で、じわじわ女性が流出してしまっているのではないかと心配。天草の商工会の方が来られて話をしたときに、天草市ではそれが現実的になっているとのこと。天草の高校生のところに東京の企業が来てどんどん連れて行ってしまっているとのこと。女性の力が流出してしまっているのではないかと、ということに危惧している。益城は子育て等に有利な場所であるというのがある。女性の力を活かしていく、子育てを支援していく、というところに留意していただきたいと思う。そこをお願いしたい。女性の力をどう活用していくか、というのはこれからの熊本県ではとても大事。さきほどフットパスの話題でもあったが、ストーリーに反応するのも女性。女性をいかに引き付けていくか、そういう視点を持っていくというのが、そもそもの地方創生の主旨を考えるとそうなると思う。
- ◆ 切り口についてのご意見がいくつか出たと思う。今後、町の方で具体的な案の検討をされていくと思うが、この視点で見ると…というのをチェックしながら作業をしていただければと思う。

10. その他

- 事務局より今後の進め方およびスケジュール等の連絡
 - 今回の審議会の内容を基に総合戦略の事務局修正案を作成するので、第2回審議会において事務局修正案に係る審議を行い、その後住民の方向けのワークショップ、最後に第3回審議会において住民の方の意見も反映させた確定案の審議、という流れで行っていく。

11. 閉会

以上